

馳走になつて（丁度塚本の金さんが歸つて居られて五年振りに御目に懸つた）宇野君の家へ行つた。先づ初対面の挨拶も相済んで（僕は宇野君の家へは始めてであつた）敏正君の病室へ行つた。沈んで居るだらうか熱の餘勢で弱つて居るだらうか、顔を見る迄は心配でたまらない、思ひ切つて入つて見れば驚くべし宇野君ニコ／＼して居るじやないか。まるで少しも變らない、少しほと頬痩せしたかなーと思はれる位であつた。僕の喜びはどんなであつたらう。明日にも一緒に歸れる様な氣がした。而も敏正君はそれから後、僅に一週間此の世の人であつたのだ。余り元氣がよいものだから、何とか張り合がぬけた様な調子で、只病氣大切、早く御全快をのみ祈つて歸るより外、致し方がなかつた。敏正君の家でも是非今日は泊つて歸れと勧めて下さつたが、強いて御断りをして、終列車で歸つた。嗚呼僕は何故此日、敏正君の家で泊めてもらつて一生御別れの物語をして來なかつたのか。何故長さ御別れの言葉を残して來なかつたのか。嗚呼我如何せんや、凡俗には一寸先きも暗の夜であつた。僕は只全快をのみ祈つて敏正君が泊つて歸れと云ふものを聞かず歸つて了たのである。之れが敏正君と僕との永の御別れであるとはそもそも誰人が知つて居ろうか、嗚呼、本意なき此の永の御別れ。學校へ歸つても、毎日必ず教室までやつて來るあの三部の大きな人、敏正君が來ないじやないか「わゝ淋しいものだ、學校を休んで居てもこんなだに若し居なくなつたら……」此の様な感じが切々起つて來たが。然し「何だそんな忌はしい事を」と打消して自ら慰めて居つた。十一月もはや中頃となつた。三尾の紅葉今こそ見物よとの噂であつた。敏正君が居つたら一緒に行くのに……と思ふて居たが、どある友達に誘はれ、十二日の日曜に行く事になつた。十二日朝は誠によい御天氣であつた。「敏正君が居つたら曛

面白からうに、まあ致し方もない」と思ひ乍ら十二時前に北野天神へと出かけた。此所で一行(四人)が落ち合ふ事になつて居たのだ。所が約束の時零時半には誰も來ない、失禮など思ひ乍ら待つ程に、今迄雲だに見る事の出來なかつた空は俄にかき曇つて、西北の方、愛宕の山は早や雨が降つて居るらしい。暫くして僕の所へもやつて來た「之はしまつた、最う今日は駄目だな」と獨り呟き乍ら憎らしげに雨降らす天をにらまへて居つたが致し方もない。早や一時となつた「ハテ三人どうしたのかしらん、まさか偽りもせまいに」と思ふても見るが雨は益々ふる、何とも殘念でならなかつた。客待ちの車夫を相手に高尾等の話をして居つたら三人がやつと來た、三人共ねれて居る。時正に一時を過ぐる事十五分。来るなり「やーどうも失敬した曛かし怒つて居たらう。まあ許してくれ」こう云はれちや詰る術もない。不満足らしい顔をして立つて居た「行かう」と促がされて、雨のしぶ／＼と降る中を構はず出かけた「之から高尾迄は小三里ある。雨はしぶる、少しつらいなあ」等獨り考へ乍ら三人の跡へついて行つた。三人共脊が底いのでコムバスの短かい事僕にどつては隨分お附合が苦しい「敏正君が居つたら二人でお先へ失敬してやるのだがなあ」と思ひ、つも其人は居ないから致し方がない、三人は話がよく合ふらしい。僕一人黙々として従ふた、雨は少し強くなつて來た。時計は丁度二時だつた、到頭馳け足に相成つた。凡そ二十分計り走つたろう何だか面白くなつた。高尾についたのは三時半頃だつたろう。大抵の見客は皆歸路について居つた。雨中に於ける三尾の勝景を稱へつゝ七時過ぎに下宿へ歸つた。洋服はすぐ／＼だ其晩は疲れの爲めか非常によく寝て了つた。翌日も何事もなく済んだ。僕だけは。十四日の朝、毎日よりも少しく遅く學校へ行つた、友達が端書が來て居る由傳へ

て呉れた。いつもの通り次の時間に取りに行く積りであつたが、何を思ふたのか僕と立つて門衛室へ走つた此の時已に先生は教壇の上に居つたのだけれど、門衛に「高橋の端書ツ」と催促した。「封書もあります」と云ふて渡して呉れた。何心なく受取つて見れば二通共塙本の金さんからだ。解せぬ、先づ端書をツと見るかあらぬか僕は電氣にでも感じたかの様、總身ぶるぐ、振つて手に持つ葉書の上に思はざる涙一零。あはれそもこは真か?間違に非ざるか、いたづらに非るか、はたまた自分の讀達へか、幾度も繰り返すも文面は同じ「敏正君の葬儀は十四日に行ふ」と云ふのである。僕は直に封筒に手をかけた。切るなり取出して讀んだ見るど「敏正君は十二日午後二時永き眠りに就た。腹膜炎となつたのだ」扱てもくあはれな事であつた。可愛想な事であつた。敏正君今は最早や此の世の人があらずなのだ。嗚呼僕は樂觀し過ぎて居つた。安心し過ぎて居つた、よもや此様な事のあらうとは夢にも思はなかつた。嗚呼はからざりきく世は無常とは云へ、なきかくの如きか。さるにても敏正君春秋に富める身を以て希望に満てざる心を以て、最早や助からないと觀念したろう其時のその心、果して如何であつたろうか、思ふたに胸もはり裂けぬ許りである。可愛想な事いや、が然しく凡夫とは云へ無二の親友が今や此の世を去ると云ふ時に、之をしも夢にだに知らずして、浮れ歩いて居るとはそもそも何事であるか、淺ましや、敏正君許してくれ。何とも申し譯もない、今は如何せむ術もないのである。一生の名残りせめては御葬式にでも參ろうぞ。かく思ひ定めて、何心なく寄宿舍に行つて友達の漁車案内を引出した、漁車は十時よりない。之も致し方がない、ハテ葬式は何時であつたかなアと端書、封書何れを見ても十四日とある許り、時間は見當らない、もしや見落しではあるまいかと幾度見ても

ない、さてはあちらでも忙しくて居る哩。さるにても此の手紙の遅い事何とした事だ、何故電報でも呉れなかつたのだろう。止んねるかなく、萬事は過去となつた。今に於てごとく云ふたとて致し方もない次第只沈み込んで停身場へ行つた。漁車には乗つたが葬式が済んだ後だつたらう……等色々の事を考へつゝ一時前に能登川へ着いた。早速人力車を雇ふたが生憎やお翁さんで、初め余り僕が急いだものだからくたばつて了ふた。こうなるとどこまでも悪く行くものだ。余儀なく降りて走つた。「萬が一葬式が午後であつてくれればよいが」土堤の様な所を走つて村の端へ來た、丁度此時、嗚呼何と云はふか、幸と云はうか、悲しと云はうか。敏正君の柩は將に火葬場へと運ばるゝのではないか。僕は立ちすくんで了ふた。今から考へると其時どうしたのであるか少しも覺はない、只山の上に鐘の音の響くのを聞いて、火葬場へは行きも得やらず直ちに宇野さんの家へ行つた丈は覺ゆて居る、宇野さんの御宅でもどんなにして居つたかそれも今はしつかり覺はない。夕方になつて川嶋君等と連立つて火葬場へ行つた。足も氣と共に重々しく動き憎い。近づくと共に異様の臭ひがした。僕は思はず涙が出た、未だ盛に燃ゆて居るのではないか。あゝ之があの大きい敏正君の最後であるかと思ふた時には身も心も消ゆ失せよと計りに感じた、悲しき哉死、悲しき哉死。僕は白骨の御文章「無常の風……一つの目忽ちに一つの息永く絶ゆねば……夜半の煙となし果てねれば只骨のみぞ残れり、哀れと云ふも中々愚かなり云々」を思ひ出さるを得なかつた。さてく果ない人間の一生であるわい。南無孝譽篤實敏正居士。

翌る日何とかほんやりして居たが、昨日よりは氣が落ちついている。静に來し方を回想して見るとまるで夢の様である。十月の廿一日の体操の時間に戯談云つて別れた事、五日に見舞に來て、知らず／＼に永の御別れをした事、友の己に世を去りしことをも知らず繪端書等送りし事、之を夢の様だと云はで何と云はうか。はてさて悲しい事ではないか。

只僕の嬉しく悦ばしく思ふたのは敏正君が如何にも立派な大往生をして呉れた事だ、彼でこそ出来たのだ、僕も死ぬ時はかくの如き大往生を遂げたいものだ。

東山の麓なる寓居の一室、四方は静になる。敏正君在世の當時を思ひ出でゝ追慕に堪へない。居士の御魂永く我を忘れ給ふな。（了）

緋絨の鎧をつけて太刀佩きて

見ばやどぞ思ふ山櫻花

落合直文

かすみ立つ末の松山ほのくと

波にはなるゝ横雲のそら

藤原家隆



○日誌摘要

- 四十四年六月十一日 武術大會開催
- 十八日 天氣晴朗縣下聯合庭球大會を開く
- 九月一日 第二學期始業式舉行
- 廿二日 招魂社參拜
- 廿八日 佐和山神社參拜
- 十月八日 行啓紀念式舉行後大洞にて臨時水上大會を開く
- 十月十五日 第四學年奈良地方へ修學旅行す
- 十月十八日 第三學年敦賀地方へ修學旅行す
- 十九日 第三學年以下安土城陳蹟憑弔
- 廿七日 東宮殿下奉送迎
- 十一月一日 井伊直弼公誕辰會に參拜
- 三日 拜賀式舉行雨天なり
- 四日 天空開麗、陸上大運動會を開く
- 六日 帝國大學文科大學教授婦崎正治氏及日本中央科編纂官文學士中村勝麿氏の講演あり
- 十一月廿二日 演說會開催
- 廿三日 武術會例會開催
- 廿六日 庭球競技會を開く風なし
- 十二月二日 發火演習を行ふ
- 四十五年一月一日 拜賀式舉行瑞氣天地に満つ
- 一月八日 第三學期始業式舉行大矢先生を迎ふ第十八旅團長久能少將來校講話あり閱兵式を行ふ
- 二月二日 兎狩を催す獲物無慮一匹
- 二月十一日 拜賀式舉行、分列式を行ふ、後武術會例會開催

○降壇の辞

難誌部理事一同

操觚者となり斯養となりて諸子と偕に本分を屈さん事を誓ひ、頑篤に鞭ち路に當りてより茲に暮年、業に辭任するの秋は來りぬ。茫乎として夢の如し。百爾預期と添はず慚愧背汗、恂々言ふ處を知らず。

雖然思へ、楯に兩面あり物に表裏あり、此處に園丁あり庭園なるべからず、此處に斯養あり俱樂部なるべからざるを。我誌の不振は、事に莅む者固より肉祖荊を負ひ跪して謝せざるも亦會員諸子の責を擔ふ處なくんばあらず。敢て言はん、我に侃諤の論容繡腸の詩人索ね覓めて得ずと、否遙れて出でずと。

舌の人は忌憚なく虹霓を吐け、筆の人は遠大の思想を洩せ。不然、當路、饒へ拏々力を残し摩頂放踵すと雖も爭でか得べけんや、彼の柑の華然金色あり之

兵庫神戸地方歴史	同	古川 清	朝鮮志	同	朴 文雄
吾家	同	中島 惣助	鳥居本村歴史	第二年級	角田 與市
商工業	同	藤村爲次郎	彦根町歴史	同	西村 賢造
犬上郡管内調査栗	同	太田儀三郎	彦根町地理	同	山本十二郎
馬山行	同	西村金之丞	宗教	同	岩増 文雄
我が家	同	清水 佐七	多賀村地理	同	土田長四郎
愛知川教育	第三年級	成宮 英三	千本村宗教	同	谷田 二郎
八日市農業	同	珠玖 義造	漁獵	同	杉本 元三
香深村地理同博物	同	茶木精一郎	彦根町歴史	同	若宮惣次郎
福満村地理	同	内片 義信	漁獵	同	中道 龍夫
彦根町商工業	同	矢島 知秀	東甲良村風俗習慣	同	吉田 真雄
東黒田村農業	同	井關 弘	愛知川村歴史	同	山本雄太郎
旭村農業	同	片山 三郎	上草野村歴史	第一年級	草野 兵二
神戸市歴史	同	柴 吉一	彦根地理	同	廣瀬 蓮麿
彦根町地理歴史	同	村田 信一	東黒田村歴史及宗教	同	奥西 真次
犬上郡史	同	北川安次郎	彦根町地理		

を割けば敗絮の若く、外を衝ひて愚瞽を感じが如きに至らん。

我雑誌部の前途を想到して忏々慨息に已へず壇を降るに暨び洪聲して會員諸子の覺醒を促す。

●夏季休業課題成績優等者

伊吹山研究

阪田郡風俗習慣

第五年級

中西藤四郎

犬上郡に於ける教育

同

木川 正義

犬上郡の教育

同

田井中信一

阪田郡地誌及歴史

同

柴田太三郎

犬上郡の博物に就て

同

本池清次郎

辛亥筆のすさび

同

村山千太郎

愛知郡歴史断篇

同

小川喜重郎

愛知郡歴史

同

丸木英太郎

犬上郡に於ける歴史

同

東淺井郡史

大村萬之介

東甲良村地理 同 上田重三

躍の當年を偲びて感慨無量なり。

高宮村農業

局 山本 博

卷之三

司
服
光
國

南青柳村地理

同
今村八良兵衛

武佐村歴史

同村谷顯一

息鄉村神社佛閣

同
北川洋次郎

彦根地理

同
三趙幾太尉

○安土山紀行

三公集

三年級以下三百餘名、昧爽軒を發して能登川驛に下車し、山麓を魚貫して行く、安土の舊趾翠微の裡

に隠見紅葉點々風景画の如し

既にして暁ノ場を變じ、日服の聲を以て、信長の前

戰ひ孳々營々力を屈し慮を盡して生等を育まる。

謹んで其の鴻恩を謝し速かに宿痾の快愈を祈る。

○發火演習記

(攻擊軍從軍紀)

極月二日、我校は茲に發火演習を行はれぬ、久しう
體肉の歎に苦しみつゝわりしときなれば、五百の赤
鬼武者の脳裡には既に劍影の閃き、砲聲の耳朵を打
つあらむ。午前九時隊伍整々堂々と校門を辭し、約
三時間許りにして漸く番場に達しぬ。此處に晝飯を
すませし後、嘵劉たる集合喇叭のもとに整列、池田
先生より想定命令下る。曰く、「敵は昨夜愛知川驛に
下車し漸次北進せむとし、その一部隊は既に米原以
北に進撃しつゝあり、我中隊はこの部隊を鳥居本以
南に撃退せむとす、即第一小隊は命により直ちに、

英雄の偉業空しく山丘の嘆なくんばあらす。
辨當を喫す。腹果然たるを覺ゆ。

或は石上に詩を題し、紅葉を焚き或は戦國の昔を想
ひて信長の偉業を慕ひ非業に泣き、時を費すこと良
久しく山を降り坂路につく。

●宇野先生を送る　木枯吹き荒みて黃葉翻々
天地落莫たり。恩師宇野先生補柳の質を以て劇職と

而して殘部隊は數分を後れて出發せり。

俄然番場西手なる小山に砲聲一發、續いて起る銃聲これなん、敵の前衛が地の利を得て我に猛射をあびせ、我進軍を妨ぐなり、即我軍直ちに散兵して之れに應戦すれば、敵はもろくも背進す、我軍逃るを追ふて進む、然れども敵は背進しつゝも所々適地を求めて我を惱す事數度、漸く米原以南に至れば、敵此處にふみどりまリて我に抗する事頑強なり、即我に得意の一齊射撃をあびせかくれば、何條たまるべき數多の死屍傷者を殘して大速力を出して後白波を消ゆ失せぬ。我軍之れより進むに彌々警戒を嚴にし、斥候を連發、所々に斥候の小衝突あるを聞く。やがて敵は鳥居本以北の林中によれりとの報に接し直ちにその方面に進撃、ひそかに窺ひば、如何にも前方の林中に散兵線をはりをれり。忽ち戰闘は開かれたる。敵もよはや之までなりと決したけりむ、此處に

ふみどりまきて、益々頑固に此處を説途と猛射亂撃
我も又劣らずひるまずこれに應戦すれば砲煙は濛々
として天を蔽ひ、砲聲は殷々として百雷の一時に落
つるが如く、實に凄絶たり。戰機既に熟したるとき
忽ち突撃の命は下りぬ。着剣せる勇者の面々此處を
先登と争ひ奮然敵線に迫進すれば敵もさるもの尙死
守して退かず、戰益々酣なり。全軍こゝに入り亂れ
て輸贏を争ふ。折しも響く休戰喇叭は高く新戰場に
鳴りわたり、餘韻遠く遙かに及ぶ。時に午後三時小
憩の後歸途につき、四時歸校せり。(K生)

(防禦軍從軍記)

白軍(防禦軍)は正午過三吉の教永寺を出發す、隊
伍儼然寂として人籠を聞かず、唯靴聲の蕭々として
晩秋の天地に溢るのみ。

己にして一行は番場を過ぎ来種川堤に整列す。立花
中隊長の命令ありて三名の斥侯及斥侯長一名を派遣

んとす。果して敵の大軍や擊れけり擊たれけり。白
軍の謀奇なり巧妙と云ふべし。されど敵軍殊勝なる
かな尙勢あり、忽ち一齊に散じて取つて返す其隊形
分時にして又追撃し迫る。憤激堪へざるものゝ如き
や其追撃愈々急、怒濤の如く寄せ來れり。

白軍機を見てさりげなく搔足を早め、斥侯を數名遣
して疾く退き、矢倉川堤に之を迎へたり。巧なる退
却に不意を拔かれたる敵軍は、益々怒りを加へて、

弾丸に代へてぞ我に報ひける。打ちたり、打ちたり
爲に天地も搖ぐかと訝りたり。味方は地の勝を得て
動かざる事泰山に譬へんか、堂々と之に打ち迎へた
り。立花中隊長儼然と命令されて、「敵を擊退せしむ
べし」と言終るやさながら急霰の如し。同時に敵軍
の攻撃又一入繁しくなりて、忽ち急潮の如く押し寄
せて正に白軍を衝かんとす。白軍刀を交へて利あら
ざるにや此所を後にして鳥居本の此方に、大いに陣

して敵の情況を偵察せしめ、尖兵約一小隊は川堤に
近き雜木林中に伏し、本隊は尙後方の道路上に陣す
斥候の一部は山上に(菜種川の左手の山)上にあり
て敵の望視に務め、又一部は道路に沿ひて東進し敵
の動情を窺ふ。

忽ち轟然として銃聲耳を劈き谷に響き渡り戰端こゝ
に開かれぬ。續いて發砲連發。敵次第に進みて攻撃
急なり。白軍先づ退却す。敵の尖兵之を追ふ、我尖
兵は隊伍亂さず約六百米之に對へて退き、一の山
麓に陣して敵の正面より來るを猛烈に撃ち返せり。
敵の斥侯及尖兵暫し躊躇したるものゝ如しされど敵
には新手多く、入り代り立かはり、白軍を繫退せし
めんとす。我軍巧に敵を謀り撃ちつゝ容易に近づか
しめず。惜むべし遂に衆寡は敵し難し。再び退きつ
ゝ米原を過ぎ本隊は櫻ヶ原の北方に陣し尖兵は約其
八九百米前方に潛伏し、敵道路上より來るを的撃せ

を堅めて「此處ぞ敵を粉碎せんばあらす」と渾身
の勇を振ひて待ち構ふ。身これ渾て膽、意氣冲天、
鬼をも拉んとす。

稍ありて敵は次第に出没し、次第に數を増し、銃聲
亂れ忽然大軍前方凡六百米の距離に現れ、彼我の銃
聲砲聲頓に湧きて愈々相迫るや愈々繁き、砲煙濛々
と時ならぬ霧をなして道を辨せず、山裂け天轟かん
とせり。

今や戰鬪酣なり。西軍迫り迫りて、進まん距離なし
忽ち敵は面も振らず突き入り來りぬ其途端白軍は西
端に密集して之を殺滅せんと相向ふ、嗚呼、其殺那
淒然たる光景、此の時銃聲は已に止み、殺氣乾坤に
溢れて雲の行き足早く、草は伏して生なし。其間に
云ふべからざる突貫の聲、鯨波の響、兩軍に漲ざる
勇又勇、猛火猛なるを見ゆや。突如「止れ」の號令に
戰はたと終りぬ。嗚呼若し二軍相突き合ひたらんに

は如何に大修羅場を實現すべきぞ屍は山となし、血は流れて河となるは疑はず。

折しも曇りし空は點々雨を漏らし、歸路切り通しの峠を過ぎし時、城山は夕の煙に立籠められて蒼然雨中に屹立し、四百の健兒の勞を慰むるが如く相向へたり。(了)

◎新年拜賀式會 朝日よさか昇る山松の梢に葉籠る蟬聲長閑にて紀元二千五百七十二歳の新春を迎へぬ。講堂にて拜賀式を舉行す。天の羽衣まれに着てなつともつきぬ巖ぞ君が代を祝言ぐ聲天地を動かす。

○大矢先生を迎ふ 會者常離一瞬の習ひ、さきに宇野先生の辭任に逢うて離愁の悲に泣きぬ。されど、茲に其の後任として大矢先生を迎ふ。吾等の喜、幾何ぞや。先生よ頗くば先生の腦裡に深く藏め

基の紀元節祝賀をし奉る。

部 報

◎演舌討論大會

鳴かず飛ばざる事茲に一年有半或人曰「彦根の舌會は衰へたり」ご然れ共何ぞ知らん「雲雀の高き幾何か永續するを得べき吾人の工ナ

トジ此處に蓋ふ事能はず遂に破れて此處に至る必ずや沖天の慨あらん。

時は霜立つ二十二日之が烈を表はしゝ事項を記さん。

●演舌部部長御子柴先生開會の辭 エー久しぶりに

我演舌部の開かれましたに付き一言申して置きたい

事があります、本會は諸子の修養研究の爲め正課時

間を割いたものでありまして決して娛樂的大會では

ありません、仍て諸子は誠心誠意己の主張する處其欲する處を述られん事を望む。尙ほ今回は從前のも

のと變り五分間演舌に類するものにて一人約七分の

られたる豊富の學識を吾等に頌與教導せられむ事を望む。

○免狩 曇天を厭はず甲乙部隊に分れて原茅附近の山谷にて免狩を罷ず、双方共初二回は勞して功なく終りけれど甲部隊(立花先生指揮)は三回目に内太一匹まんまと得捕り歡呼の聲山を振る。晝餉後甲乙合併し一大規模にて獲取せんこす。時に雨猛然征衣悉く潤ふ準備整頓し五百の健兒間の聲を擧げ山嶽一時に鳴動し首尾よく追詰めけれども兔一匹も出でざりしころ返す返すも遺憾なりき。執念き雨いつかな歎ます兎追に出陣してぬれ鼠となりて歸りける亦なくさましけれ。

○紀元節 鶴は松上に舞ふて四海浪靜かなり。一同講堂に聚り拜賀式を舉行す。伊士の禍未だ解けず、友邦の生靈亦鋒鏑塗炭に苦しむ、聽つて我皇室の世々清美の民によりて盤石の安に居り、國民は列聖明時の大仁厚澤に浴して太平の樂を享け以て二千五百七十二載の今日に至れるに想倒し、斯の國に生れ斯の時に遇へるを相慶しつゝ、護國の赤誠を盡し皇基を無窮に傳ふる所以を思ひ謹んで皇祖肇

豫定でありますから其邊誤解無き様に。又本日は遠山先生の特別演舌をして下さるとの事だから靜肅に拜聴せられん事を望む。

小早川會長の訓辭 入しぶりにて開會す從來の如き方法にては正課時間を割くの價値無し仍て大いに改良を要す。

日常吾人が其志操感情を正しく發表すると言ふ事は處世上必要な事である、其發表法には三種ある即ち

一、言語 發表方法の差異に依り種々あり例へば

談話、講演、演舌、論議等

一、文學 文章、詩歌等

能はざる機微を描出するを得

吾人は其の何れを取るも良しよろしく其極に達せん事をつとむべし。

第一席 雪

一年 井上 新一

雲に關する科學的説明より脱き其結合力の大にして強なることを言ひ以て一致結合せよと結ぶ。

第二席 復習の必要

一年 今村 八良兵衛

學術を師より受くるも常に之を復習せざれば忘れ易しかの小童が唄は數多の練習復習によりて得たる也。

學術も亦斯の如し故に吾等は受くるの多きを望まんよりは寧ろ復習を重ねて確實なる智を蓄はへよご真く脱きたるも語調少しく速まに失せざりしか。

第三席 専心

一年 小川 輿重郎

吾人學生の重んずべき事は多々あり而も予は專心を以て最必要となす、レンツを以て太陽の光線を集むれば物体を燃焼するに足るの熱を得べし

豈に思はざるべけんやと比較的單獨なりしも之れ時間の然らしむるものか

第四席 失望落膽する勿れ

一年 山本 博

失望と云ひ落膽と云ひ學生時代には往々ある事である是れ眞に人をして不幸不運の域に導くものであつて一つの精神病とも云ふべきも

沙着の態度なりしも聲少しく低きに失せざりしか、

第八席 艱難と男子

うらむ其聲の低くして凡に失せしを、

潰刺たる語氣之を男性的諧氣と云ふ、頗る意を得たるもの曰「フキを以て苦しき爲はずは論するに足らず之を如何に料理すべきかと考へざるべからず、

男子は艱難に遭ひて初めて眞實を發す、見よ雨天の後には晴天來るにはあらずや、

艱難に遭へ而して之に打ち勝て」と、

第九席 千古不朽の大和魂

二年 西村 恒照

大和魂とは盡忠報國に歸す、かの源平の古より或は日本海戰の例を引きて以て其大和魂の發揮を示し最後に其養成に努めよと結ぶ、雄麗の辭、

第十席 目的選定の必要と其動機

二年 辻 孝蔵

淳々と目的選擇の必要と其動機をとく、老巧の辯、内容豐富、

第一席 已を知れ 二年 竹中喜久三
自己を知るの必要あり我校生徒の此觀念ぞしき爲め受けたる惡評を述べ大いに改革を望む、

のである之を救治せんには自ら之が手術を施さねばならぬ

人をして失望落膽の極に陥らしむる原因是、澤山有りませうが其重なるものを擧げるご賛美失敗等である失敗は人の常である、此位の事に意氣消沈するものは直ちに其胸襟の如何に少であるか一見して知られる

之れ實に見識狭く堅實の念の乏しいものである男子と稱すべき價値の無いものである吾等宜しく目の黒い間は斯かる弱音をはいてはならん

第五席 ベルニュー中尉の忠義

一年 草野 兵二

南歐フランスの一軍人、大奈翁の旗下にありて忠義を盡すと云ふ、歴史的小説。

第六席 富田大鳳

一年 廣瀬 蓮麿

説く所は之れ維新の一勤王家、沈着の態度愛すべし、言語明瞭一年辯士中最も異彩をはなでり、

第七席 アラビヤンナイトの一奇話

二年 中道 龍夫

アラビヤンナイト中の一奇話

第十三席 吾人の覺悟

三年 熊谷 譲

將來に於ける吾人の活動方面より社會は障害物の集點也と云ひ身心鍛錬法及品性の高上法を述べ學生覺悟及責任より校風の發揮に及ぶ言語整然而も熟誠、

第十四席 所感

三年 大杉 友七

吾人の過去を脱き、學校的生活と社會的生活との連絡の必要を論じ正に大いに惜陰に努めよと願るクリヤーなりき、

第十五席 趣味ある記憶法

三年 岩崎 甲藏

數を記憶するに單に機械に之を棒暗記するよりも趣味を添へて之を考へ且つ確實に記する事例へば

第十六席 不變不風の精神

三年 鹿苑 慎教

智を磨き德を修め体を練らんとするものゝ進路を遮りて不幸不運の淵に陥らしむるものは實に失望落膽也、之れ吾人の最も恐るべき惡魔にして拔山の勇一世の知を抱けるものをして碌々として非を叫ばしむるもの也、吾等は之が豫防に意を用ふること同時に之等が爲めに默々たる事勿れと言語態度要領等一點の非難すべき處なし、君尚ほ春秋に富む自重せよ、

第十七席 謙遜 四年 小川喜重郎
神聖なる演壇に立ちし光榮をのべ次に露國皇帝陛下ご某少佐との實例を引き語を改めて曰「余生れて約二十年未だ嘗て竹が暴風に折られしを聞かず却て喬木の之に折られしの度々なるを聞く是れ何の故ぞや、諸君は兄等が世に處する必ず一刻たりごも謙遜を忘るべからず」

二

第十八席 學生ご元氣

四年 北川巳之助

一國の興亡は吾等青年の元氣の存否に依る事の大なるを述べ、次で例をスバルタに求め維新後に於ける我國學生の狀態に就き元氣錦沈せる將た柔弱に陥るを叫び現在平和場裡に立ちて優越の地位を得るは体力の強壯と氣力の活潑なるに依るを云々、

第十九席 だご 四年 潤水佐七

に偉大なる教を垂れて居るのでありますと、吾人、君が辯に接して感慨轉た切也、

第二十一席 失敗を利用せよ 五年 今井賢三

現今青年の自殺多きを見るは失敗の結果にして人生は失敗必ず來るべきを說き失敗に耐へて之を利用し以て成功的域に達せよご、單且つ明確かに二重箇點を附すべきの語なり

第二十二席 對岸の火災 五年 中野逸太郎

浦國の動亂を嘆じて引ひて我國に及び之を學校に落して校風の興振を促す老巧の辯、三嘆の外なし、
云ふ而も君の言頗る快活にしてクリヤー也

第二十三席 HOW TO SPEAK

五年 T. Nakaniishi.

一般に流行せるに本校のみ獨り英語演舌の少きを以て吾人此處に一辯を試みんご其理由を述べ次に例を上げて話すには快活なるべまを云ふ而も君の言頗る快活にしてクリヤー也

第二十四席 臭氣 五年 小松哲精

吾人の説かんとする處臭氣は液体に非ず氣体にあらず勿論固体にもあらず俗に云ふ「邪魔くさい」之也即ち精神の腐敗を意味す「故に臭いものには蠅たかる」にて小にしては将来に於て街路に立ちて恵

團子の味の良否は其小部分の加減によりて定まるもの也即ち一班は全体に影響するもの也

。談合戸端會議茶話會演舌會等數種ある中にて最も有効にして且つ必要あるは演説會であります、吾等は本校に於て正課時間を割いて行はるゝ演説會を充分に利用したいのであります、

團硬。學園學校は一つの團体であります、團体として其堅硬を望むのは當然の事で、余は望む大いにストライキすべしだと、但し余の云ふストライキは世の青二才が錐末に不平を抱いて以て其私怨を満足せしめんがためにするが如もきのでは無い、宜しく教師生徒一團となつて他校にストライキすべしである、

沈着の態度愛すべきも少しく明ならざりし乎、

第二十席 佐久間艇長に就て 四年 野中嘉蔵

艇長佐久間勉氏が潛行艇沈没の際に壯烈忠誠を極めたる遺言書を残して武士的最後をこげました、其當時萬天下の新聞紙も國民も隨分敬意を拂つて居つた様であつたが一年後の今日に至つてはすでに人々の頭の何れの所にあるか分らない大いに嘆すべきではありませんか拙者はかの廣瀬中佐の誠忠仁勇なりし態度と正しく光を比するに足るものであると考へます、而して其遺書に至つては僅々の文字中

を乞はしむるに至り大にして國威發揮を妨ぐるのみならず國を亡ぼすに至るべし。

水上部々報

○武德會出漕記

端艇競漕會。私はこの五字を見る度聞く度に、堪ねがたき苦痛と、遺憾ない遺憾と、重くるしい壓迫とそして、飛びたつ程の喜悦と、希望とに充ち満ちた情緒をいたくのである。武德會第十一會端艇競漕會は八月四日石場で開かれた。本校からは、第一撰手

と、第二撰手と、外に卒業生と本校生の有志者よりなる、彦陽俱樂部との三艇出漕する事になつた。

第一撰手 第二撰手

舵手 遠藤 歌三 小川喜十郎
整調 押谷 利吉 澄谷 重雄
横田 貢一

四番 藤井 忠男 勝馬 繁三
 三番 増田 豊 前田 直三
 二番 蚩野 孝三 川崎 俊雄
 一番 堀口増太郎 村山仙太郎

昨年本校撰手の大勝利は名譽ある優勝旗をもたらせた。この名譽あり、且つ責任あるあとをついだ撰手は、再びこの名譽を重さんものと、臥薪嘗膽、猛烈なる練習は始まつた。心なき城山嵐も、鼓角の響とさゝまがふ、比叡の夕照には、來らん、八月の戰場をしのびて、練習をはげんだ。第一學期の試験の始まる頃、我等の先輩たる、今東大にある村上義一君にられて、約一週間ばかり、色々と御教導されたかくて、第一學期の試験も終り、我が第一撰手は熾ゆる希望を胸にいたいて、七月二十七日、池田先生に連れられていよいよ上津する事になつた。宿は四宮の佃亭、練習は翌日より始めた。

第一回

白 湖國團 宇治 二着

赤 彦陽俱樂部 大堀 一着 五分四十八秒

豫定より少し後れて、十時第一回レースが開始された。白、赤共に湖國の健兒、色服闊かに、馬首をスタートにならべた。發艇係の船に、旗がひらりと掲た。ズドン電光石火!、赤の「ユリダシ」(不幸にして當日は、「スベリダシ」と云ふ術語を用ふる事が出来なかつた、風濤高く、艇を弄ぶものだから)は可なりに手際よくいつた。赤は最初ヒツナ四十一、焦りにあせりて、急調につぐに急調を以てし、息吐くまもあらせず攻めてし、ミッドル前にて、白をぬく事三艇身。しかし、それより赤の速力少しくにぶるを見ゆるや、白は猛然馬力を出し、ラストヘビーを以て、撃破したけれども時既にかそく、1/2秒の差を以て壊滅した。

第五回

白 本校第一撰手 大堀 二着

赤 關西學院 加茂 一着 五分廿一秒

愈々、筆を新めて、第一撰手の戰況を報する事になつた。昔から敗軍の將兵を語らずとか云ふ。私は、餘り兵を語るのは善くないと悟たから、簡単に報告する。嚴冬、酷暑と戰ひて、其腕をきたへた撰手は、熱烈なる應援隊の喚聲に送られて、艇に乗つた。かくて、曳かれて、發艇線に向ふ。この時のチヤンの心中や如何。自分達は撰手である、校友及先輩から大いに囑せられてゐる。自分達の使命は勝にある。他に、チヤンの使命の多くあるは、勿論だが、當面の使命は勝つにある。この「勝」と云ふ一字のため自分等は今まで櫛風沐雨した。臥薪嘗膽した。寒風吹きすさむ冬日、炎熱焼く夏日、荒浪吠ゆる日、さては旭日眩き朝、自分等は毎日出漕した、勝たんがた

然るに連日煙雨濛々、湖山雨又雨にて、豫期せし如き練習をする事出来ず。この不順極まる天候には、少なからずなやまされた。然し雨の晴れ間くには時に石山あたりまで、遠漕を試みた事もあつた。

第二選手はボートにて途中練習をこころみつゝ舟木堅田に宿りを重さねて、七月三十一日、又大津の人となつた。彦陽俱樂部の撰手は、八月一日上津したレースの日はまた。天公の無情なる、關ヶ原とも云ふべき其日は、夜來の雨いまだ晴れず、軒の玉水の音、寢覺の枕に響くも佗しく、徒らに健兒の心を、傷ましめるのみであつた。八時頃より、稍降り止む氣色見いたれど、比良、比叡の連嶺に雲足早く、始めより終りまで、大波小波打ち騒ぎて、レースには最も不都合、不便な條件を、悉く具備してゐた。私は禿筆を呵して、我校選手の當時の状況を簡単に述べんとする。

めには、自分等は茶をたつた。入浴もたつた、好きな菓子をも食はざる事、既に一ヶ月をして鍛へに鍊た此腕、此脚、此腰、此腹！からじつと見つめていふと、油のぬけた皮膚の内部で、太つた筋肉の隆起するものが見ゆる。若々しひ濃厚な血液は、今盛んに廻つて居る。あゝ筋よ、あゝ骨よ、あゝ血よ！願くはこの五分間、汝が全力を盡して、我れを勝たしめよと、柔しく撫でると、筋骨は我が意を了解したかの如く、ビク～と動くと、見る一滴落ちしは何か人こそしらぬ感極の熱涙である。何人もこんなに考へたであらう。

旭日旗がヒラリと輝いた。ズドン！それ漕げ

赤白共に、スタート見事に仕切り、三八の同調を以て進んだ、我れの操撃意の如くならず、平素練習がひの、少しもあらはれざるに、敵はバツクよくきみて次第に寸を侵され尺を與へて重圍遂に脱するに以て破れた。

特選競漕 八
白 本校第一選手 加茂 二着
赤 米子中學選手 宇治 一着 五分十一秒
これ振り落された、殘念レースの組合せである。赤は延中に破れたもの、日本海の荒浪狂ふ、米子の士である。はからざりき、いかに時味方に非なりとはいへ、かかる初陣の敵のために、再び敗を重ねんとは！

我が彦陽城下から、出陣したる三艇の中、二艇の幸に勝利を得たのは、縣下の他の諸校に比して、良い

由なきに至つた。特意のバツクモアも功なく、最後の轟進にうつりしが、時既にかそく、あはれ新進の士に、名をなさしめたるぞ、是非もなき。

第七回の終了後、優勝旗の返納式が舉行された、昨年の選手が、血を以てとりしもの、本年もど思ひしが、今はすでにその望なく、この後は又いつと思へば、實に感慨無量であつた。

第八回

赤 本校第二選手 宇治 一着 五分卅六秒
白 膳中第二選手 加茂 二着

膳中第一選手は既に八日市商業に敗れてふつた、このレースは、共に兄貴が討死を目の前に見ての、弔合戦と云ふ、辛い戦なのである、其の力も伯仲し、いづれも湖畔の勇士である。二艇は武者振勇ましくスタートに並ぶ。

號然一發。赤は白に比して、好調子でユリ出し、勢成績といはねばならぬ。然しながら、最も大なる責任を有し、且つ最も多く囁せられてゐた、第一擇手の無残や一度も懸軍萬里の敵のために、斃れたるはかへすぐも遺憾な事である。白波雪の加く飛ぶところ、健兒悲壯の涙にくるふのであつた。然らば我れの敗因如何と。私は之れをのべたくない。何故敗れたか知らないが、私の勝手に理屈をこじつけても世人は自己辯解責任の轉嫁としか考へないのであらうあ、あの日天氣が……もう云ふまい。

敬愛する校友諸君、自分達は不肖にして、もろくも破れた。けれども、我が膳中水上部は決してかかるもろいものではない、早晚このはじをすういで、赫えたる榮譽をもたらす日のくるのを、確く信んずるのである。（完）

○紀念水上大會

十月八日 東宮殿下行啓紀念の日をトして我が部臨時紀念大會を大洞に開く。開會午前十時風なく波なかりしが折りあしく六回頃より雨降り出してやまず、午後益々甚しきに遂に鑑定を遂行せしは

大いに快ごする所なり、當日の概況左の如し

第一回 三隻互角の勢好取組なり、澤勝間隊に白赤を抜く間一髪の思あり一着白五分五十秒

第二回 第一回に比して、取組ふるはず、青の勢一段劣る、決勝の瞬間赤、白をぬきたるは、勉めたりといふべし、一着亦五分五十一秒

第三回 勝負にならず、青の五番切腹したるに拘らず二着を得たるは怒すべし、赤は中途元氣くじけて決勝點に入らず責むべし、一着白六分二秒

第四回 白比較的よし、青と赤とは兄たり難く弟たり難し、一着白六分二十秒

回	種別	區	舵手	整調	五番	四番	三番	二番	舳手
---	----	---	----	----	----	----	----	----	----

第五回 赤は回航の際揚おれたるに非らず、力溌て列外に出たるは男兒の本領を失へるもの責べし、一着白六分七秒

第六回 青の後れたる事甚し、この競漕中雨しさりにふりきたる、一着赤六分二秒

第七回 當日の模範レースなり、赤少しく早く白にさき立て決勝線に入る、一着赤五分四十八秒

第八回 白最初より優勢にて回航亦早く他に先連て決勝線に入る、一着白六分八秒

第九回 白早く一艇身の差あり、赤の列外は卑法、一着白五分五十九秒

第十回 分數最も早まもの三艇をにらびたる優勝レースなり、青よく白を制して月桂冠を得たり、一着青五分五十七秒

第十五回 白は大上、赤は愛知五名に他郡のもの二名を加へたる對那レースなり、面白き取組なりしが少しの差を以て白の勝となる、一着白五分五十三秒

回八第	回七第	回六第	回五第	回四第	回三第	回二第	回一第		
通 普	範 モ	通 普	通 普	通 普	通 普	通 普	通 普		
青白赤	白 赤	青白赤	青白赤	青白赤	青白赤	青白赤	青白赤		
城西平	小 遠	小杉中	佐野瀬	林谷中	木柴河	若岸西	寺伊辻		
戸島岩	川 藤	松本野	成捨川	村西	子田井	林本居	田藤		
松谷中	押 藤	石水塚	新北西	木朴山	東茶淺	松本北	馬朝野		
林田道	谷 井	原谷本	野安澤	村武田	木見	宮池春	場奈瀬		
布安中	東 井	嶋秋村	村三吉	北杉山	前中勝	村小澤	藤細村		
村並五	關	瀬山田	山間川	已本脇	田川木	發池	原田岸		
小遠林	勝 加	大神勝	藤遠敷	西加平	川瀧横	大疋山	川瀧敷		
松藤	馬 納	橋口馬	居藤野	嶋語岩	崎谷田	村田亮	崎谷野		
横村前	増 前	域野瀬	林谷辻	前増堀	岡草井	藤小元	堀押増		
田山田	田 田	戸村川	村	田田口	野場關	了川持	口谷田		
松居若	川 澄	居小白	柴寺伊	北古本	文村布	勝神服	勝北種		
宮川林	崎 谷	川堀石	田澤義	宜川池	田谷本	馬口部	仁宜村		
小脇小	横 小	土村清	川西木	内林西	野草野	大泉加	高中水		
川坂池	田 松	田西水	井居子	片 居	村 田	藤 杉	憲 森	西江	
			義文弟	信野爲					

回九第	通	普	赤	高	坂	澤森
回十第	勝	優	勝	青	白	赤
回十一	對	赤	愛知郡會第一撰手	上寺	高	上
回十二	郡	白	犬上郡會第二撰手	坂	澤	新片安
回十三	赤	中	野	野	小	川
回十四	白	遠	藤	蚊	川	勝
回十五	赤	服	部	野	口	馬
回十六	白	神	神	藤	勝	前
回十七	赤	口	口	居	居	田
回十八	青	庄	庄	野	野	川
回十九	白	瀧	瀧	村	坂	坂
回二十	赤	大	大	中	中	谷塚山
回廿一	青	木	木	前	加	押
回廿二	白	中	中	藤	藤	谷
回廿三	赤	瀧	瀧	語	野	前
回廿四	白	大	大	西	北	倉
回廿五	赤	中	中	澤	澤	村
回廿六	青	瀧	瀧	內	野	藤
回廿七	白	大	大	片	中	中

謂テニスデーなり。敝に應じて集りし學校五、本校撰手を出す事七組。觀客環視の内に行われし競技の結果は

六月十八日本校主催縣下庭球の聯合大會を開く。此日暑からず寒からず、照らず降らず、風亦死す、所

● 縣下庭球聯合大會に於ける本校選手（その一）

第二回の優勝仕合に於而

(5) 岩崎(師) 岩江(師) 岩岸(師) 岩吉(師) 岩川(師)
 (7) 藤堀(水) 藤原(水) 藤堀(水) 藤原(水) 藤堀(水)
 (9) 真弓(商) 真弓(商) 真弓(商) 真弓(商) 真弓(商)
 (11) 榎木(阪) 榎木(阪) 榎木(阪) 榎木(阪) 榎木(阪)
 (13) 内林(水) 東野(水) 東野(水) 東野(水) 東野(水)

(15) 大塚(師) 盐谷(師) 盐谷(師) 盐谷(師) 盐谷(師)
 (17) 林平(本) 谷中(本) 谷中(本) 谷中(本) 谷中(本)
 (1) 吉田(本) 関田(本) 関田(本) 関田(本) 関田(本)
 (3) 村上(水) 三間(水) 三間(水) 三間(水) 三間(水)

(7) 谷中(本) 谷中(本) 谷中(本) 谷中(本) 谷中(本)
 (1) 吉田(本) 真島(本) 真島(本) 真島(本) 真島(本)
 (1) 朴岡(坂) 三間(本) 三間(本) 三間(本) 三間(本)
 (1) 吉田(本) 岩崎(水) 岩崎(水) 岩崎(水) 岩崎(水)

最優勝に於而
 (1) 吉田(本) 森池(本) 川嶋(阪) 吉田(本) 岩崎(水) 岩崎(水) 岩崎(水) 岩崎(水)
 (3) 村上(水) 寺島(本) 仁志田(水) 仁志田(水) 仁志田(水) 仁志田(水) 仁志田(水) 仁志田(水)
 (1) 朴岡(坂) 三間(水) 横畠(膳) 横畠(膳) 横畠(膳) 横畠(膳) 横畠(膳) 横畠(膳)
 (1) 吉田(本) 岩崎(水) 岩崎(水) 岩崎(水) 岩崎(水) 岩崎(水) 岩崎(水) 岩崎(水)

桂冠を得ざりしは遺憾なれども本校選手の位置は悪しと云ふべからず。縣下第一流なり舜何人ぞ我何人ぞ。徒に遺憾の淵に沈まむより攻々攻究に務めむに孰與れ。因記す澤組及岡田組には本校より授賞せり

● 球庭大會

春ばかりテニスの球のよい音のする時はなからう、ボーン／＼ご温かい音が優しく鼓膜に響く、殊に京橋袂の邊で優暢な音を聞くご空を飛んでゞも早く入つて見たい心持になる。六月廿四日の日もさすがに此の則にはづれなかつた、然し外面は優賜な様でも其實は摩猛な競争が續いて居るので、之を評して他日檜舞臺に於ける我

校生徒の活動の摸型をコート上に作つたものだと云つてもよからう
悪戯苦闘、壯絶快絶、たしかに金龜城下の王子ルギーは勃發しちよ
る言之を見しものバイロンたゞ泣き懦夫たらば起らもしよう、

(1) ○○ 脇坂 ○ 中山

(2) ○○ 上坂 ○ 増田

(3) ○○ 大塚 ○ 小川

(4) ○○ 内方 ○ 藤村爲

(5) ○○ 山田信 ○ 中山

(6) ○○ 北村 ○ 若林

(7) ○○ 阿部 ○ 大杉

(8) ○○ 吉川 ○ 川崎

(9) ○○ 中島 ○ 前田

(10) ○○ 寺田 ○ 森村

(11) ○○ 尾原 ○ 村谷

(12) ○○ 上田 ○ 川崎

(13) ○○ 伊藤 ○ 佐成

(14) ○○ 服部 ○ 中西

(15) ○○ 脇坂 ○ 柴田

(16) ○○ 伊藤 ○ 今井

(17) ○○ 伊藤 ○ 幸島

(18) ○○ 伊藤 ○ 幸島

(19) ○○ 梅田先生 ○ 水島先生

(20) ○○ 安田 ○ 衣斐

(21) ○○ 西居 ○ 中野

(22) ○○ 横田 ○ 北村武

(23) ○○ 吉村 ○ 増田

(24) ○○ 石田 ○ 村谷

(25) ○○ 川井 ○ 北村

(26) ○○ 林 ○ 中西

(27) ○○ 濱口先生 ○ 平岩

(28) ○○ 濱口 ○ 茶木

(29) ○○ 山岡先生 ○ 遠山先生

(30) ○○ 岡野 ○ 明塚

(31) ○○ 倉垣 ○ 澄谷

本日は土曜日にて観客出技者の多かつたのは誠に感謝に堪へぬ

林組は師範の副將に當りよく眞技を發揮し彼一點收
むれば我亦一點を收むること恰も我行けば雲亦行き
云々の觀ありきと雖も大星先づ我軍に落ちしを如何
せむ。あへなく功を奏せずして止みぬ。

中西組は膳中の大將組に當り僥倖にもゲームツィゼ
ロに至りしが後衛の勝を急ぎし爲反て桂冠を敵に與
へぬ。

今は他を云はず。後繼者の爲す所あらむことを期す
るあるのみ。(エス、ティ生記)

○ 庭 球 大 會

風を待たで自ら散る桐の葉一つ二つ、秋も未なりぬ、我部は茲に
十一月廿六日(日曜日)を下してブレーの宣告とともに勇ましくも試
合は開始されぬ、豈快事ならずや、日頃の練習を積まれし諸健兒の
技量とも如何、いざやろの成績を示さん、

草野組も初陣なれ共常にも似ずエラーも無く先づ始
めの敵を追散らし遂に優勝仕合に加はりたり。

森池組も草野組と同様非常に成績よく殊に子バリ氣
強く優勝仕合に列するを得たり。

吉田組は常に勝りて技量現れしが初陣の事と云ひ
敵が阪本佛中の重鎮と云ひ孰れに敗するも無理から
ぬ事。

草野組も初陣なれ共常にも似ずエラーも無く先づ始
めの敵を追散らし遂に優勝仕合に加はりたり。

森池組も草野組と同様非常に成績よく殊に子バリ氣
強く優勝仕合に列するを得たり。

吉田組は常に勝りて技量現れしが初陣の事と云ひ
敵が阪本佛中の重鎮と云ひ孰れに敗するも無理から
ぬ事。

岡田組は八商の中堅に當りしが運拙なく遂に斃れぬ
但し此の取組は技量に軽便ありしに非ず、全く出来
合の勝負の如く思はれき。

岡田組は八商の中堅に當りしが運拙なく遂に斃れぬ
但し此の取組は技量に軽便ありしに非ず、全く出来
合の勝負の如く思はれき。

- (5) 木村○○井關
申川 茶木 (6) ○○岡野○朴武
(7) ○○勝瀬君(入船)○平岩 (8) ○○小山
岩崎君 林 (9) 布木
(10) ○○水江○木子
北川君○藤原 (11) 佐成
大矢君 森地 (12) ○○奥村
西村 (13) ○○川谷○高森 (14) ○○石田
柴田 木子 (15) ○○池田先生○梅田先生
木島先生 藤川先生 (16) ○○中西○○草野
谷村 三間 (17) ○○末松
中村 (18) ○○幸島
中村 (19) ○○草野
谷村 (20) ○○中西○○草野
中村 (21) ○○西村
中村 (22) ○○若林
谷村 (23) ○○中西○○草野
中村 (24) ○○西村
中村 (25) ○○若林
谷村

午後より少々風吹き來り、回を追ふにつれ轟々強く吹き鳴めに充分の快を盡す能はず、衆等しく風伯を恨む、午後四時終了せり、

(ヶ生)

例年舉行される大日本武徳大會は五日より六日に渡り開かる我校も又これに應ずこの武徳大會は名にし負ふ事なれば我國到る所の若武士は數日前より馳せ参り市中のかなたこなたに陣を敷き作戦計畫をめぐらしつ我一行も三條秋田屋に陣取りて其の夜はあしたの仕合を夢見つゝ夙く寝につき明くれば五日晴天鏡の如く一點の雲だなく日輪東山の林間より輝きて銀線を流す、日頃の手腕をあらばすは今日ぞと男む赤鬼武士腕によりして已に武徳殿に到れば數百の驍将集ひ來り勇氣慄々眼光燐然道具と稽古着を肩にして自ら殺氣勃々たり既にして式終へ仕合開れたり回數を重ねる中忽ち彦中の聲我等の耳朵を打ちこなたより悠々としてあらはれたる我が撰手

○○○彦根中魚崎青年夜學會濱田千代造

○第十三回 武徳大會劍道

相互に少しばし機を見しが敵先づ面を加ふれば我何を

と勇み直ち打ち返すオ胴一本！互に奮戰方圖せしが我が銃さ鋒先は屢々胴を加へしが不思議や何の宣言もなし遂にあやしき面にて敵に名なさしめ無念にも退く

×○○(大坂支部) 今井兼之

藤村爲次郎

敵は我れより太兵なれども我之れを物ともせナ互に秘術をつくせしが直ち敵オ面一本！我何をと勇み直ち打ち返すオ面一本！こゝに勝負となりて互に銃さ切先を入れ交へしが互に得る所なく引き分けとなる

○○○(米澤中) 新野辰三郎

神口 権八

得意の大聲以て敵を威壓し何なく落す面胴花々しく

勝ちを得

○○○(兵庫柏原中) 宮本 勇

○○○(彦中) 山田信太郎

我が校の驍將勝敗はと見れば一退一進この妙所をつくし直ち占ひるオ胴一本！敵も何にと勇みて打返す

六日、昨日に劣らぬ好天氣、當日は神口山田の奮戰十時半頃神口權八殿中に踊り出た敵は山形米澤中學の男、新野辰次郎である。神口はニュー・チャンピオンであるが得意の上段に構へエ！と掛け聲と共に面を打ち落す、敵は上段にマツツキ狼狽の体又も小手一本奇麗に入れ欣然として貯る、お次は山田信太郎、敵は兵庫柏原中學宮本勇である色の黒い印度の鳥のような顔、我校最後の決戦一勝敗如何を見る間に面を一本頂戴す、山田何ッと小手を入れ、ヤレ～と胸を撫で居る瞬間胴を頂戴した、無念の涙を呑んで引き退いた、此れで劍道班はすんだのである、

七日、本日より柔道班の活動すべき時は來た、先づ

第一番に現れたるのが草場左喜造、敵は富田林中學
藪内信次である、勝負は三本五分間である柔道の試
合は時間をするから中々骨折りだ、そして我校の
選手の體は皆少しく實に六ヶ敷い競争である、草場
長き足にて巻き込み押し倒し固業一本を得、時追つ
て分けとなる草場賞牌を手にし得意然として歸る、
次に横田貫一は堺市盛武館梅鉢楠太郎と取り組む兩
者共に立派なくび面、互に引き合ひばかりしてこ
ねついて居つた、横田奮戦したがボート癖があつて
残念に分けとなつた、兩者一本もなしとは平凡だつ
た、次に佐成武二郎である呼出し係り如何した間違
いか位成武三郎と大きな聲で呼んで居つた一寸滑稽
敵は天王寺中學の岡本榮之助であつた年格向、二十
一二とも見ゆる大の男、手荒い男で中々の苦闘であ
つた、満身の勇を振つて飛び掛り押し倒して固業を
やる、すると一本と審判官の聲がする油斷の所を岡

○武術部 大會

あやに長しこきすめら御國の基を建て給ひし神武のみかご御即位の
白衣更着十一日を下して我が部は茲に大會を開く今茲に記せん

剣道班演武成績

(横井○○	(小林○○	(藤村○○
(江島○○	(横柳○○	(西郡○○
(澤田○○	(村谷○○	(北村○○
(熊谷○○	(池田○○	(清水○○
(松村○○	(前川○○	(新野○○
(前川○○	(安部○○	(朝日奈○○
(松村○○	(朝日奈○○	(石田○○
(木下○○	(坂○○	(坂○○
(服部○○	(竹内○○	(中澤○○
(村田○○	(坂○○	(坂○○
(上坂○○	(竹中○○	(中道○○
(佐成○○	(久徳○○	(西山○○
(草場○○	(藤腹○○	(中村○○
(朴○○	(大杉○○	(山田○○
(神口○○	(平岩○○	(山田○○
(浅見○○	(服部○○	(藤村○○
		(波木井○○
		(高田○○
		(波木井○○
		(中村○○
		(中道○○
		(西山○○
		(前川○○
		(寺脇○○
		(横柳○○
		(澤○○

許せ

坂對中村之はまるで面と竹刀が歩いて居るようだ竹刀は身の丈の三
倍實に小さい者だ平凡の試合は扱て置き第十七回の上坂監佐成は衆
目を引いた佐成は大小の両刀で戰ふ元氣と滑稽こまるめたような試
合大刀を落して小刀ではね廻る其の滑稽さ圖らず牌を踊らした併し
両刀試合とは珍らしい當部開闢以來遂に見ない次に山田神口の試合
神口得意の上段に構へた然し手で竹刀を拂つたのは氣にくはぬ
最後の平岩の組だ皆平岩の歎腕を望んで居つたが常にな意氣消沈
の休だつた

柔道班演武成績

(波木井○○	(寺脇○○	(高田○○
(寺脇○○	(坂○○	(坂○○
(坂○○	(久徳○○	(寺脇○○
(竹中○○	(北村○○	(北村○○
(中道○○	(大島井○○	(大島井○○
(西山○○	(寺田○○	(寺田○○
(中村○○	(藤浦○○	(藤浦○○
(河北×	(草場○○	(草場○○
(北村○○	(北村○○	(北村○○
(高田○○	(竹中○○	(竹中○○
(波木井○○	(久徳○○	(久徳○○
(中村○○	(北村○○	(北村○○
(中道○○	(阿部○○	(阿部○○
(西山○○	(松村○○	(松村○○
(前川○○	(村谷○○	(村谷○○
(寺脇○○	(朴○○	(朴○○
(横柳○○	(澤○○	(澤○○
(澤○○		

記者詳して曰く先づ第一回の横井對江島はなかく敏掠に働いた併
し横井は筋くさいスタイル江島は嫋くさいスタイル飛んで第八回の

本捨身を掛け一本を取る、後奮戦の時なくベル鳴つ
て分けとなる、兩者一本宛の勝負にて、賞牌を受く
て分けとなる、兩者一本宛の勝負にて、賞牌を受く

次は加藤脚氣を病み居りしが爲め脚太り甚だ不体裁
なる歩調なりき、次に加藤譚海にして相手欠席の爲
め膳所中學の黒ロマンボル某と取り組み、譚海は体太
短く大きからざる男なり故に隣人曰く、ソラかばち

やになすびの試合だと、やう滑にして稽なりき、両
者盛に戦ふたが遂に時間の迫り來た一瞬時、「一本」
の宣告、一寸我等凡眼では解らぬ審判であつた、次
に最終の試合なる小森哲精現る敵は庄内中學の伊藤
健次郎で大の男、腰投げの逆を取られて一本の敗と
なる、殘念の至りである、茲に於て目出度く終つた
ので我等撰手一同は附添督、本多先生に從つて凱歌
を歌いつゝ無事歸彦す、願はくば我等一同萬の罪を
許せ

記者恭しく各員の御面相を評す先づ第一回より波木井は鼻下に黒點あり寺脇は蓄力アリ次に高田は所謂棒丸ヅラ坂はヤンチャヅラ明徳は頬赤く目の丸の様ちや久徳は色黒く印度の鳥のやうぢや以下第十四回まで便所に行きたるご横見して居つたので知らないハ、中道は隣ろうな面して資けた西山は何が怨めしいか目玉が横面で居る阿部は顔は兎も角首が失敬して居る前川は青い顔して危篤電報を打つてもよさうだ

以下皆々 平凡面語るに足らず

午後一時半より又始めた樂賣には、揚武館、新東西兩小學校、島井小学校等隨分盛大だつた。

卷之三

(鳥小森居○)	(鳥小成宮○)	(鳥小寺村○○)
(東小小林○)	(東小近藤○)	(東小田中○)
(鳥小曾根○○)	(東小富田X)	(東小今村○○)
(東小廣田○)	(中池山)	(中竹中)
(島小北川)		

卷之三

(西小) 塚本	(西小) 嘉崎○	(東小) 近藤×
(西小) 塚本	(西小) 岛崎○	(東小) 小森
(西小) 塚本	(東小) 今村○○	(中) 池山
(西小) 塚本	(東小) 藤井○○	(東小) 加藤
(西小) 塚本	(東小) 鹿田○	(揚)
(西小) 塚本	(東小) 村田○○	
(西小) 塚本	(東小) 一寺鶴	
(中) 中		

書いたい事が多すぎて聞く力がもとで人に話したくなる。本小学校は前述の
望であると思ふなかへ敏腕家が居る。

金鳳國慶神社の御事を聽する中秋二十日我が部は茲に武術部大會を開く今朝の盛況を記せん

正術部大曾

剣道三本仕合

東小	(布施)	×	本校	(江島)	
東小	(富田○)	×	東小	(布施○)	×
東小	(高田○)	×	警察	(安部○)	
揚武	(高田○)	×	揚武	(橋本○)	
本校	(山田○)		本校	(橋本○)	
揚武	(橋本○)		本校	(藤村○)	
本校	(藤村○)	×	本校	(中村○)	
東小	(大山○)		東小	(大山○)	
全し且ついやまし此の精闘を發揮せられん事を					
対外試合					
西小	(竹村○)		西小	(島崎○)	
同	(今村○)		本校	(片野○)	
東小	(廣田○)		東小	(林○)	
同	(小森○)		本校	(中村○)	
東小	(藤村○)		東小	(高田○)	
本校	(服部○)		本校	(松村○)	
東小	(廣田○)		東小	(廣田○)	
本校	(北村○)		揚武	(加藤○)	
東小	(伊藤○)		西小	(今村○)	
同	(廣田○)		西小	(原田○)	×
本校	(池山○)				

對外試合

(柔道部)

感化され花は標本人は武士と願くは譲子益々日本固有の武士道を保全し且ついやまし此の精神を輝かせられん事を

◎陸上運動會記事

祝砲と共に、競技は始められしや。會員一同勇氣日頃に百倍し各己が競争に於ては動作活潑規律整正、よく平素身心鍛錬の實を發揮せり。從つて觀覽者の數刻一刻に増加し。場内殆んど又立錐の餘地なきに至れり。實に實に盛會と言はざるを得ざりき。

第一回 四百メートル競争 各も亦に黃に白に青に紫に色どられたる帽子を戴いて表はれ出でたる二十有余名の健兒、己が月桂冠と、己が勝をと獨り思ふ途端、號砲一發、既に勇壯なるランニングは始まれり「赤帽ぬいた」「紫負けた」と云ふ時しも各々決勝線に走りこみぬ。さて其の結果と尋ねれば、一着北村武三(一分一秒)二着勝馬仁之亮(一分三秒)、三着

山本十二郎(一分四秒)

第二回 二百メートル競争 一週競争はスタート早ければ勝なるか、勝木分次郎はうまく走りて一着分數僅に二十四秒、小川與重郎、上田重三は各々一秒

着上杉源八、一着なる小男子天晴なる勝利かな
第八回 六百米競争 捩ひも揃ふてグレートの若者、見事の競技一廻程は各伯仲の間にありしに二週目に相成りては強きものはづんづと抜く、愚な者は近く廻りてスッテンコロ、期を見てヘビーを出だし勝馬馬より早しと見ぬしが果して轟砲一發と共に白旗を握る一着勝馬繁藏(一分三十四秒)二着新野太郎、三着井上新一

第九回 六百米競争 一着川崎俊雄(一分二十九秒)二着寺澤政四(一分三十三秒)三着小松哲精(一分三十四秒)

始める程は寺澤、特意の走ぶり見事なりしが二週の後は一向振はず、之を見て凌駕する一男子、正しく川崎なり、既にして勝敗決して右の如し

○第十四回 二人三脚競争 一着三越幾太郎、前川栄一、二着西澤要一郎、夏原勘三

の差を以つて二着三着

第三回 二百米 一着谷原惠惟、二着野谷信三、三着村西平太郎、さすがは谷原谷や谷と驕ける妙技を以つて前回より一秒少なく(二十二秒)勝利を得、後の二名は審判困りの一秒達ひ

第四回 球竿競争 紛擾の中をたくみに切り抜けしは勝利を得しに、記録の手落、さぞ御承知の人は無念にぞ

第五回 球竿競争 出發點は大事なり、殊に球竿競争は然り一着を得し西居忠一、若林敏次郎兩氏のスマートは迅速なりしが、果して案の通りに。二着の健脚家は藤澤鐵熊木有七郎

第六回 戴囊競争 一着山西、二着秋口喜代次郎、三着小野精一、誠にうまく豆袋を戴せて走りには多分學校の歸りにも書物とのせて練習せし結果ならん第七回 戴囊競争 一 坂績、二着上田與三郎、三着小野精一、誠にうまく豆袋を戴せて走りには多分學校の歸りにも書物とのせて練習せし結果ならん

第十一回 二人三脚 一着を得し北村武三、倉垣數馬は始めより優勢、二着濱野増吉、泉濯纓は辛じて二着の末席をけがす

第十二回 重荷競争 一着中島惣助、二着川崎俊雄三着小川喜重郎、力負けぬと誇る力士のみ、一目散に驅けて、土俵をどれども案外の重み、中島は体軀逞く持つより擣ぎて走る見事な様、小川之に次ぎて走れども、決勝線數尺前にて川崎に越されしは不憫の至りなりき

第十三回 重荷競争 一着上坂香苗、二着前田直三三着押谷利吉、全校屈指の力士連、殊に上坂は最優なれば、遂に一着を占む、然れ共、前田も亦重荷競争のチャムピヨンなり、決勝線も少し遠かりせば上

坂の一着やう心つかうべきなり

第十四回 四百米競争 一着石原與四郎、二着馬場重太郎、三着大鳥居彦司、石原始めより優勢、五十九秒にて勝利、馬場一分二秒とは差の甚しきも餘りあり

第十五回 四百米競争 各眞面目に走りしは賞すべし既にして勝負決して次の如し、一着加藤甚一郎（一分二秒）二着宮尾源一郎（一分一秒）三着茶木精一（一分二秒）

第十六回 一人一脚競争 一着松本宇之助（四十九秒）二着種村（五十秒）三着大谷多吉郎（五十一秒）

骨の折れる競争を忍んで勝を占めしは御目出度ふ

第十七回 一人一脚競争 一着三間久太郎（四十三秒）二着大塚留吉（四十五秒）三着小菅傳吉（四十六秒）

三間一度に飛ぶ久太郎、いかに大塚の留めんとする

第三郎、三着山本十一

半分頃は各々伯仲の間にありしがいざも十秒となりては皆一生懸命、中にも清水は清き走り方もてよく衆に先んずること、既に數尺、砲聲高く天を破りて勝敗決す

第二十回 一分間競争 一着清水佐七、二着清水彌

喜久三、三着西谷恒照、決勝線近く迄安全に來たる

第二十五回 戴囊競争 一着杉本元三、二着池山秀

三着土田長四郎、松林始めより優勢大鳥居も劣らず走る松林へビーを出して勝を得

第二十二回 戴囊競争 一着岡野清、二着、石田貫一、用意!!ドン早や五六人も囊を落して後戻り静かに急いで悠々と決勝點に入つたのが岡野

第二十三回 盲陸競争 一着本庄慶一、村西平太郎二着朴武雄熊木九郎、最も滑稽な競争観客は抱腹絶倒本庄組辛うじて決勝線に入る

第二十四回 盲陸競争 一着勝馬繁三、山中庄造、

二着村山千太郎脇阪常治郎、他を凌ぎて先頭にあるは勝馬組と村山組なり盲は知らぬ顔なれども畳は氣が氣でならずやつとの事で勝馬組決勝線に辻む、第二十五回 二百米 一着服部、第二着川崎武夫、第三着中田清一郎、何れも年少のチャンピオン服部二十七秒を以て勝を制す

もかなはず、遂に決勝線に躍り込む

第十八回 二人三脚 一着矢嶋知秀山中莊造（三十一秒）二着中村勇吉宮川頼一

第十九回 二人三脚 一着高橋保良松宮一成、二着前田直三、勝馬繁三、大男連の寄合、でも歩調整は

すしてころがる、勝馬組の如きはよくも之中を切りぬけて、今しも高橋組を凌がんとするかりしも時既に遅し

第二十五回 二百米競争 一着松本元三、二着大鳥居

喜久三、三着西谷恒照、決勝線近く迄安全に來たる

第二十六回 二百米競争 一着松林、二着大鳥居

三着土田長四郎、松林始めより優勢大鳥居も劣らず走る松林へビーを出して勝を得

第二十七回 抽籤競争 一着杉本元三、二着池山秀

夫、三着加納喜三郎、メートルに足らぬ小男八貫目の砂俵をもてあまし五尺の大男バケツを片手に元氣

よく決勝點に入るところが札を落して頭搔き／＼退場する

第二十八回 抽籤競争 一着小池廣次、二着大谷、

三着上田榮二郎、抽籤は全く僥倖を持む競争である

丈夫的でない然し身軀の纖弱なるが爲めにかやうな運動を選ぶのであらう小池は運よく白旗を得た

第二十九回 二千米A 一着草場左喜造、二着寺嶋久太郎、三着服部恭三、選手の面々今やスタートに

並んだ何れも意氣揚々として日頃の腕前を示すは此時なりあらん限りのエナーゼを込めて月桂冠を得ん

ものといふ様な顔付きで號砲を待つてゐるズトソと響くと共に驅け出した五回迄位は皆一齋に驅けてゐた七回八回となつては意氣沮喪する者があるに引替へ勇氣百倍する者もあり、實に目覺ましき者勝負の見當もつく、最も優勢なるは草場、果せる哉、十回目には、他を凌ぐ甚だし、然し寺島も亦仲々のチヤンピヨン細き脛を速く通はす事實に神妙

第三十回 一着村山千太郎（六分四十二秒）二着嶋瀬卯之助（六分四十二秒五）三着藤澤鐵眼、二十名のグッドランナーは一發の號砲と共に駆け出だす、應援は愈々激しく、七回目迄は唯一氣に走りしのみなりしが九回目になれば、各自特有のヘビーを出すこと疾く實に目覺しかりき、就中最優等なる村山、短かきコムバスを速くかよはす、韋馱天の如く疾走す、次いで島瀬も劣らず駆ける、ラストヘビーに於て島瀬は殆んど村山を抜かんとせしが、遂に及ばず、勝

第三十一回 母衣引 一着瀧谷重雄、二着井上新一
三着清水佐七、美しき母衣引がへる様いと美觀なり
第三十二回 二分間競争 一着堀口増太郎、二着川崎俊雄、三着上坂香苗、斯道のオーリチー堀口撰手初めより終り迄先頭の位置を保てり、然れども亦優勢、時に堀口を凌ぐの勢ありしもいかでか勝つことを得べき、堀口は白旗を手にし、川崎は青旗を肩にして悠々たり

第三十三回 兎競争 一着藤腹清一、二着蒲山元紀三盛谷彰雄、兎然として飛ぶ貌いと面白し、藤腹は大きなる腸を運びて遂に一着を占む

第三十四回 執銃耐忍競争 前田直三（三分五十九秒）蚊野孝三（三分五八秒）山田（三分三六）腕力家我慢家の集合なり、二分位より腕がいたひ、感覺がな

うなる、眼ばかり白黒して居る、其の群を抜き泰然

と且つ自若たる者之正しく前田也、外の者は、丸で閻魔に抹香をふすべし休、蚊野も亦中々我慢家云ひ草が面白い、未だく餘裕ありと

第三十五回 我慢くらべの結果次の如し

大村三分五十五、井闇三分五十四秒、加藤三分二〇秒

第三十六回 二百米 一着安田、二着塙本英二郎、三野坂太造、安田ラストヘビーを以つて勝つ、塙本次いで決勝線に入る

第三十七回 猫糞 一着寺澤、二新野太郎、三幸島七與一紙袋をかひり後へ進ひ、極めて滑稽なり

第三十八回 土器割 白組勝 紅組負

白軍の大將上坂、紅軍の大將増田各々其の部下に下知し自ら數人の壯士を從へて奮戦す、初め紅軍有望なりしも中途にて備を亂り、白軍不意に侵入して紅軍を懲らす、大將目懸けて打ち込む、増田大將一時

中々モーションが敏捷ですされ程早いといざ非常召

集の時にもまだつく様な事はあるまい。我國陸軍の前途亦有望なる哉。

第四十回 武裝競走

に多數の敵を受け衆寡敵せず遂に斃る

第三十九回 母衣引競争 一着川崎、二着平岩、三

着押谷観客の歓聲湧くが如く四方より起り老練なる

母衣引チャンを喜ばしめぬ

第四十一回 武裝競争

沈着の態而も敏也又驚かざるを得ない。

一着 西川	一分三七秒
二着 大石	一分四〇秒
三着	一分四一秒

第四十二回 母衣引競走(B組)

一 着	川	崎
二 着	平	岩
三 着	押	谷
四 着	中	島

観客の歓聲は湧くが如く四方より起りて實に華麗にして趣味深き競技然もA組とは代りて老練家の御揃ひで丸で五色の胡蝶が吾れ先にと競ふの状に似て一方のならぬ興味を與へたり

第四十三回 四百メートル(D組)

一 着	元	持	五	四	妙
二 着	小	堀	五	六	秒
三 着	山	本	五	八	秒

第四十四回

A B C の三組も經て愈々 D組となつた大分の顔連が見ゆるさすがモーレン早き野球チャシヒオソなる小堀も一周は其勢猛にして當る能はざるが如けれ共如何せん……近鐵名物男元持突然小堀を抜きたるか

第四十八回 一千メートル 一着堀口増太郎(五十

八	秒	二	着	本	莊	慶	一	(六	分	五	秒
九	秒	三	着	前	田	直	三	九	秒	九	秒

砲聲空を破りてスタートを離る二十有餘の大男、五六回迄は何れが勝とも定められしが、俄然衆に先んづる小男一人、之を本校ランニングのオーソリチー

堀口君とは知られる、次に走る本庄之も斯道のチヤンピヨン、次いで走るは之を金龜中學名物男の一人前田無鐵砲其の人なりき

ヤン(夏原)無鐵砲(前田)彼は讀んで字の如し何事も無鐵砲にやる、ボートの三番漕ぎ始むれば無鐵砲にて一人にて數人をうける位の大力士、日臺(井上)瀧谷の瀧柿、行司のスタイル、呼び出しの聲亦要領を得たりき

第五十回 障碍物競争 眼渡せば千障萬碍、スタートより間もなく高飛び、梯くぐり、綱くぐり、金棒梁木、蓮くぐり、繩條綱鬼に金棒で敏捷なりし小川喜十郎一着、二着瀧谷、三着、大塚

第五十一回 障碍物競争

斯道の大家の寄合、其モーレンの敏たる口をあかざるを得ず、一着川崎、二着寺澤、三着元持者を擧ぐれば闇羅王(中野逸)中々以つて顔つきより骨ぐみ闇魔式大關、川中島(勝馬)は流石四番手だけありステキ、川中島の意蓋し深重也、天しる地しる知る人ぞ知る、名稱の奇抜なるをあぐれば、インジ

と思へば早や既に決勝點とはなりぬ

第四十四回 四百メートル(E組)

一 着	增	田	五十五	秒
二 着	草	野(眞)	一	分
三 着	中	島	一分二	秒

全五回に渡る四百メートル競走も本競走はその主たるものにして二十名の健兒早くもスタートに立ちて一發のものに發す何しろ短距離の事なればスタートへビー其勢獰猛にして抜きの抜けられ觀客手に汗を握りたり

第四十六回

第四十七回 一千米競争

例によりて大元氣ありき神口、勝馬始めより優勢、蚊野は途中より馬力を出し、九周目には四人目がなかつた故に彼樂觀して曰く、後より走る者なれば勝は必定

て現はれ出でたる二十有餘の少年、心浮き立ちて、出發點にならぶ、今か今かと相圖を待つ途端、

轟砲一發、優は先に劣は後れて仲には轉々者あり。

やがて勝敗は決しぬ。一着森田（一分三十一秒）二着

福田、三着小倉、四着川口、五着梶、六着若宮……

勝ちしは恵比須の如く、負けしは閻魔の如し。

第五十四回 小學校生徒競争 拔きつ、抜かれつす

る中に殆んど同時に馳けこみたり。一着吉原、二着

安田、三着北村、四着中村、五着大萩、六着北村

第五十五回 猫囊競争 一つとして等しからざるそ

の顔、大きな紙囊をかむりて尻を動かす様實に可笑し、観客爲めに膽をよる一着三間、二着高森、三着今井

第五十六回 職員競争（綱引） ジエントルマンの腕

くらべとは實に趣味あり。實例は教訓に優る、先生

等かく勇壯なればこそ亦我校健兒の元氣を鼓舞する

第五十九回 五色旗取競争 一着清水彌三郎、二着 盛會を喜ばざるはなかりき。

松村七郎、三着赤松秀雄一般に無趣味なりき

第五十回 綱引一、二、三年生

三百の健兒一分に分かれ掛け聲高く調子をきめて引く引かること數回實に壯觀なりき

○中隊教練

四年五年より組織せられたる中隊池田中隊長殿に指揮せられ喇叭の聲は勇ましく足なみ備へて進みくる

一隊實に壯快西隅により五年級の一齊射擊を初めとし第二第三小隊の散開敵軍の膽をつぶしその突撃は實に壯觀なりき

○分列式
執銃隊を先登にし分列に前への號令に進む百足一足の如き歩調は日毎の訓練を回想せしめたり分列すみ校長閣下より閉場の辭あり最後に彦根中學校萬歳を三唱して散す三三五五打ち連れだちて歸るさ今日の

を得べけれ……御勝利を得られし諸先生の御芳名を舉ぐれば

紅軍東校長先生、御子柴先生、森下先生、水島先生、藤川先生、立花先生、遠山先生、金澤先生、熊瀬川先生、大和田先生、本田先生、山田門衛君

先生、奥村（一分四十二秒）二着山本（一分四十六秒）

第五十七回 來賓競争（一千米）

他校より來り給ひし選手の諸子、そのスピードの驚

猛なる、甚だ以て感じ入り候。勝者……曰く

一着奥村（一分四十二秒）二着山本（一分四十六秒）

三着吉田（一分五十三秒）

第五十八回 優勝者千米競争 一着姫口増太郎（二

分四十三秒）二着神口權八（二分五十一秒）三着本庄

慶（二分五十四秒）既に二千米競争に膽をつぶせし

本校最上のチャントヒヨン來賓なる奥村山本のいかで

か之に及ぶべきかは確かなる走り具合の如き観客をして口をあかしめ又之を閉じざらしむ

○四年級修學旅行記は駿坂湖舟生に吉野紀行あれば
重複する爲略することと致し候。

等學校。親友會雜誌十五柏崎中學校。至誠十四
大坂八尾中學校。校友會雜誌成田中學校。

寄書雜誌（四四、七月以降）



學林七二愛知縣第一中學校。北辰會雜誌六一六
二第四高等學校。學友會報四九一五五神戶高等
商業學校。校友會雜誌三五、三六濱松中學校。校
友會報十三、十四長濱農學校。渦の音二二德島
中學校。知道月報三〇、三四水戶中學校。明倫
十八名古屋明倫學校。球陽二〇沖繩第一中學校
六稜三七大坂北野中學校。近江商人六四八幡商
業學校。奉公十二滋賀縣師範學校。校友會發達
史年記念。東京高等師範學校。摩城元大垣中學
校同窓會雜誌。一〇錦城中學校。校友會々誌十一
金澤中學校。文武會誌十一畝傍中學校。獅子ヶ
城貳學期號佐渡中學校。嶽水會雜誌五〇第三高

投 稿 規 则

- 一、投稿は學術の範圍に於てし決して政治的時論に涉るべからず
- 一、投稿は本會所定の原稿用紙を用ふべし
- 一、字体は楷書假名は必ず平假名にて認め句讀を施すべし
但し圈點は一切施す事を禁ず
- 一、投稿は其編を異にすることに其用紙を別にし住所若くは年級及び姓名を明記すべし
- 一、但し論文を除くの外雅號を用ふるを許すことあるべし
- 一、投稿は其長短をとはず全編完備せるものたるべし
- 一、投稿は其掲否を問はずすべて之を返戻せず

次號締切は七月十日とす

明治廿七年五月卅日內務省認可
明治四十五年三月七日印刷（非賣品）
明治四十五年三月十一日發行

滋賀縣立彦根中學校內
編輯兼發行人 市毛 雪

印 刷 人 赤井 安吉
滋賀縣彦根町大字土橋
刷 所 近江實業新報社
滋賀縣彦根町大字土橋

行 所 滋賀縣立
彦根中學校 校友會

印 刷

行 所

滋賀縣立
彦根中學校